

学生が行く！ 土木のお仕事

篠崎 真澄 学生編集委員
相沢 圭俊 学生編集委員

第7回 「横浜市」いたち川（人物編）

都市河川の自然復元をひもとく！

〔取材協力者〕吉村伸一氏（株）吉村伸一流域計画室 代表取締役

前号のプロジェクト編では、排水路のような姿になった川に自然を蘇らせたいたち川を紹介した。今回は、当時の河川改修の常識を覆して緑あふれる川を蘇らせたキーパーソンである吉村伸一さんを取材。アイディアが実現され成功に至るまで、いったいどのような思いで進み続けてきたのだろうか。吉村さんの仕事観に迫る！

「最初、川に対する 想い入れはなかった」

吉村さんは横浜市に入庁後、下水道の設計課（管渠の設計）に所属。6年後、配転希望を出し、下水道の計画部署を希望するも願い叶わず、第二志望の河川部河川工事課に配属となった。特別川に興味があつて希望したわけではないという。河川事業は下水道と比べると予算規模も小さく、用地買収に予算が費やされるので工事関係の仕事は多くはなかった。それをいいことに、「現場に行つてきます」と言つて横浜市内の川をあちこち歩き回つ

た。それが、川に対する興味をもつ基礎になったと言う。

多くのものを見ることで、 もの良し悪しを知る

河川工事課に転属してから川に関心を持つ他のセクションの職員と知り合いい、「京都の川を見に行こう」ということになり、二十数人で京都に行った。そして、翌1982年「よこはまかわを考える会」という市民団体を立ち上げ、毎月1回の定例研究会、近くの川を見る会や遠くの川を見る会、運河を使ったカヌーフェスティバルなど、都市河川再生の活動を始めた。これらの

活動がきっかけとなり、市役所内外で幅広く友人ができ、「楽しい」という感情が生まれ、徐々に川に夢中になっていった。吉村さんはこの活動を通して、河川はまちづくりの骨格になると気づき、都市の自然を問い直そうとした。特に横浜市は丘陵地帯であるため、川が多くあるためだ。このように、未来の川づくり構想の軸は、自身の経験によるものだったという。「良い川を知るためには、多くの川を見ること以外にない」という信念ゆえに、新婚旅行でもヨーロッパの川を見に行ったため、奥さんにはあきれられてしまったと、笑いながら吉村さんは言った。

写真1
いたち川での取材風景



打ち破れ！ 前例主義

前号の通り、1982年当時は横浜市の「河川環境整備事業」がスタートし、制度的には計画を実行できる流れがあった。しかしこれまでの先輩たちによる整備事業を否定することに

YOSHIMURA Shinichi

1948年北海道生まれ、1971年に室蘭工業大学土木工学科を卒業後、横浜市役所に入庁。1976～1995年河川部に所属。いたち川など都市河川の自然再生に取り組む。1998年退職。吉村伸一流域計画室を設立、現在に至る。



写真2 いたち川の現状を見守る吉村氏

なり、計画はなかなか進まないのではないだろうか。聞くと、「そんなもの気にしない！」と吉村さんは言い切った。あまりの勢いのよさに、川づくりの計画に大きな自信があることが感じられた。「私一人で川をつくったように言われることが多いけど、そうじゃない」と言う。事業を実行に移すためには、予算の措置はもろろんのこ

と、事業に関する組織的な決裁（合意）が必要になる。組織を動かすために、合意形成に力を注いだそうだ。

具体的には、計画を前進させるために誰に相談すればいいか、キーパーソンを見極める。ダメと言われたらそこから前に進めない。だから、相手によつてはどこまで本音を言うかなど注意されたそうだ。まるで勝負師のようだと思つたが、前例を覆すためには必須な力のかもしれない。この一つひとつの積み重ねの結果、多自然川づくりが実現された。

四面楚歌

辛いことはなかったのだろうか。「やはり、最初の頃は孤独感がありましたよ。市民には余計なことするなと言われるしね」と吉村さんは語った。その頃はまだヨーロッパの「近自然河川工法」は日本に紹介されておらず、市民の関心も低かった。そんなとき、ヨーロッパの近自然工法に関するシンポジウムが愛媛県の五十崎町であるという新聞記事を目にし、休暇を取って自費で出かけたそうだ。「ヨーロッパでも同じようなことをしている」ことを知り、元気をもらったとい

う。前例のない事業を手掛けようとして、なかなか周囲の理解が得られなことも、いつか、どこかで自分の仲間を見つけていけることができる。そう信じて行動を起こしていくことが、孤独に打ち勝つ方法だと感じられた。

ぶつかることは悪いことじゃない

前号で紹介したように、いたち川で取り組んだ最初の事業は地元説明会で反対され、すぐには着工できなかつた。工事が終わってからも「子どもが川で遊んでいる。流されたらどうす

る」などの苦情が殺到し4年間事業が中断するという悲哀を味わった。

吉村さんは、住民の表面的な意見を深く考えずにそのまま受け入れてはいけないという。その意見の奥にあるものを見いだしていく、どんな川やまちにしていくのか住民と一緒に考える。そういった「参加」が大事だ。公務員技術者としては時代を先取りして「いいもの」を考え、時間をかけて軌轢を乗り越えていくべき、と語られた。自分が考えたアイディアに迷いがなく、自信があるからこそ、信念をもつてぶつかったのだろう。

COLUMN

学生へのメッセージ

幅広く現場を見る目を養ってほしい。仕事とは課題解決である。課題とは、頭の中ではなく、現場にあるものだ。まずは数々の土木遺産を見て、そこに込められた先人の技術や精神を体で学ぶこと。また、仲間をつくることで、モチベーションを維持することが重要である。

取材を終えて

取材中、吉村さんは、われわれ学生チーム以上にいたち川の撮影をしていた。理由を聞くと、「自分がつくったものだからね、心配なんだ」という。つくりっ放しではなく、退職後もその後を見守り続ける姿勢を見て、技術者としての本当のプライドを感じた。また、休日や新婚旅行中でさえも川のことを考えてしまう吉村さんを見て、仕事とは公私を分離して考えるのではなく、また自身の人生と重なった時にこそ、その仕事が天職になるのだろうと感じた。